

小学校外国語活動とコミュニケーション能力に関する一考察

大谷みどり*

Midori OTANI

Communicative Abilities and Foreign Language Activities at the Japanese Elementary School

要 旨

教育現場だけではなく様々な場で、コミュニケーションという言葉が頻繁に使われている。新学習指導要領でも、中・高等学校の外国語教育や、平成23年度より5・6年生に於いて必修化される「外国語活動」ではコミュニケーション能力が重視されている。しかしながら多用されているコミュニケーションという言葉に確立された定義はなく、個々の状況にあわせ意味する所も様々である。さらに日本では、コミュニケーションに合致する日本語訳がなく片仮名のまま使われることが多い。

拙稿では、「コミュニケーション」の意味を改めて見直し、本紀要の母体である島根大学言語教育研究会の会員によるコミュニケーションに関する見解も参考にしながら、新しく導入される小学校外国語活動に求められているコミュニケーション能力とは何かを考えてみたい。

【キーワード：小学校外国語活動、コミュニケーション能力】

I. コミュニケーションとは

・辞書・文献から

まず「コミュニケーション」という言葉の語源について触れたい。英語のCommunicationの語源は、「共通項」という意味を持つラテン語のcommunicareであり（岡部，1988），そのもとを辿るとラテン語のcommunis（「共有の」「共通の」「一般の」「公共の」などの意味を持つ）となる（新英和大辞典，2002）。それでは、日本では「コミュニケーション」という言葉をどのように捉えているのか、日本語の辞書における語彙説明を幾つか紹介したい。

日本国語大辞典（1974）ではコミュニケーションを「特定の刺激によって互いにある意味内容を交換すること。人間社会においては、言語、文字、身振りなど、様々のシンボルを仲立ちとして複雑かつ頻繁な意味内容の伝達・交換が行われ、これによって共同生活が成り立っている。(p.395)」と説明している。

一方、広辞苑（2006）では「①社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする。②[生] ⑦動物個体間での、身振りや音声・匂いなどによる情報の伝達。⑧細胞間の物質の伝達または移動 (p.1055)」と解説している。

2つを比較してみると、まずコミュニケーションによって伝えられる「内容」として、前者は「意味内容」の交換と説明しているのに対し、後者では「知覚・感情・思考」とより具体化している。その方法として両者とも言語・文字をあげた上で、前者は身振りも加え「様々のシ

ンボルを仲立ちとして」と説明し、後者は「その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介」と解説している。さらに広辞苑では、人間の社会生活だけにおいてだけではなく、生物個体間や、細胞間の物質伝達や移動にまでコミュニケーションの定義を拡げている。

しかしながら前述のように、コミュニケーションという言葉については日本語に定まった訳がなく、状況に応じて適合する日本語が様々であることを世界大百科事典（1997）では次のように解説している。

「コミュニケーション」にぴったり相当する日本語がなく、使われている文脈に応じて用語が選ばれる。情報の移動が送り手から受け手への一方通行one-wayの場合は、「報告」「通報」「通信」「伝達」である。情報が送り手と受け手との間を往復する相互通行two-wayの場合は、「会話」「討論」などで、その結果うまれる「共通理解」「合意」「ふれ合い」などもコミュニケーションの一つの形と考えられる。(p.488)

さらに「マスコミュニケーション」についての解説も加わっている。

日本大百科全書（1995）は、「人間にとって、コミュニケーションは基礎的社会過程である。個人の発達にとっても、集団や組織の形成と存続にとっても、コミュニケーションは必要不可欠であり、人間社会の基礎をなすものといってよい」(p.537)と説明した上で、「人間と社会にとって基礎的重要性をもつにもかかわらず、コミュニケーションの概念はまことに多様であって、統一された共通の定義が存在するわけではない」と加えている。このように4冊の辞書等を比較しても、コミュニケーションという言葉に対する解釈が定まっていない事が明らか

* 島根大学教育学部言語文化教育講座

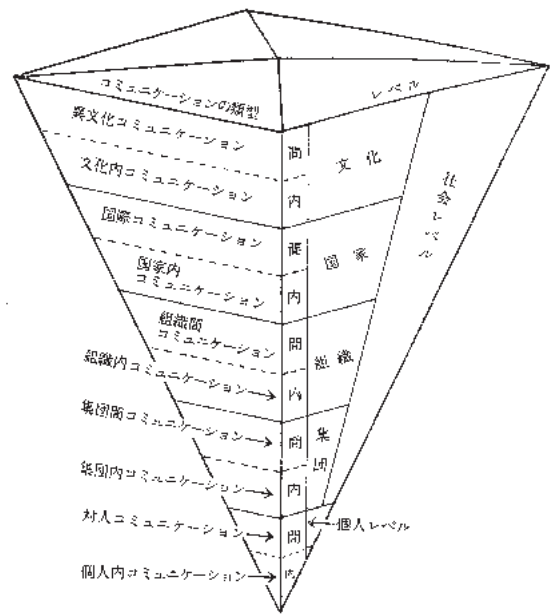
である。

文献が少し古いが、コミュニケーションに関して米国のDanceとLarson (1976) は1950年代から1970年代中葉にかけてコミュニケーションの分野で出版された研究書と研究論文、辞書、百科事典の文献を調べ、126の定義を挙げている。岡部 (1996) はそれらの定義を4つに分類している。まず定義の約35%を占める最大の類型が「相互作用過程説」で、これは「人間のコミュニケーションを人間・社会関係の基礎となるものとして捉え、コミュニケーションによる人間同士の相互作用を社会の基本的単位とする視点」と捉えている。代表的な定義として「コミュニケーションとは、他書を理解し、かつ他者からも理解されようとする過程で、状況全体の動きに応じて、常に変化する動的なものである」を挙げている。次に20%を占めたのが「刺激一反応説」で、「コミュニケーションを学習理論の観点から機械的にとらえ、刺激一反応という実験的な方法で説得効果に影響する要因を分析しようとする立場」である。第3の分類として「意味付与説」を挙げ、「媒体物としての記号が一定の意味を担い、その意味を相手に伝える家庭がコミュニケーションだとみなす立場に基づいた定義」としている。第4の分類は、ギリシャ・ローマ時代の古代レトリックの観点からコミュニケーションをとらえようとした「レトリック説」である。

さらにコミュニケーションを類型化するにあたり、岡部は基準におくものにより類型がかわる事を指摘している。例として、言語か非言語かという「メッセージ特性に基づいた類型」、情報伝達・説得・楽しみ等「コミュニケーションの目的に基づいた類型」、人と人が直接行うのか新聞やテレビなどのメディアを通してかという「チャンネル特性に基づいた類型」、近年はチャンネルとしてインターネットや携帯が大きな影響を与えている。そしてコミュニケーションのレベルにより、個人内・個人間（対人）・集団内・集団間・組織内・組織間・国家内・国家間・文化内・文化間（異文化）など「レベルによる類型」に分けられる。

このようにコミュニケーションについては定義も類型も、立場や状況により様々である。(図1参照)

最後の類型で、文化間の異文化コミュニケーションについても触れられていたが、この言語文化研究会の中で、コミュニケーションについて語る際、日本的なコミュニケーションと、英語圏、特に米国で求められるコミュニケーションとは、かなり異なると思われる。この点については、後で触れたい。



「古田 暁他 異文化コミュニケーション(1996)p.33」より

図1 コミュニケーション・レベルに基づいた類型

・「島根大学言語教育研究会」研究員の見解から

前述のように、これまでの文献や辞書でも様々な定義があり、類型の仕方も様々である。この紀要特別号を編纂している母体である「島根大学言語教育研究会」の研究員で言語教育に携わる先生方にメール上で、コミュニケーションについて次の点を尋ねてみた。1)「コミュニケーション能力とは何か」2)「児童・生徒・学生に欠けていると思われるコミュニケーション能力は、どのようなものか」3)「これからの授業を通して、児童・生徒・学生に身につけさせたいコミュニケーション能力は」の3点である。返信を寄せて下さった7名の先生方からの回答を紹介させて頂きたいと思う。校種や対象教科(国語もしくは英語)の違いなどから、この研究会の中でも立場や状況により捉え方が異なるのが分かる。

まず1)「コミュニケーション能力とは」という問いに対しては、次のような回答を寄せて頂いた。

「相手の意を汲み取りながら互いの意思を発信しあうこと」

「言葉や表情、身振りなどのやりとりをなめらかに行う能力」

「(前回の世代間コミュニケーションと教育)プロジェクトでは「一方向的な伝達」と仮に置き換えて考察した」

「相手のことを知りたい、話をしてみたい、自分のことを伝えたい、知ってもらいたいと思う気持ちを持ちながら関わりをもつこと。決して言葉が通じなくても、その思いを伝えること。相手との関係の中で、自分も相手も不快な思いにならない関係を作り上げることができる力」

「他者(の心情)について想像を働かせると共に、自己の主観について反省的にとらえ、慎重に理解を進めようとする能力」

「態度とスキルの両輪によって成り立つもの。(スキルだけを身につけている状態は「コミュニケーション能力がある」とは言えないと考えます) この場合のスキルには、技能のみならずコミュニケーションの方略を知り、使用できることを含めたい」

「①狭義の言語能力(文法・語彙能力)を基盤にして、②談話能力(まとまった文章を作る力)、③社会言語能力(場面と相手に合わせて適切な言語表現を使う力)④方略的能力(非言語的なストラテジー)を駆使して意思伝達を図る力」

これらの回答からも、コミュニケーションに対する捉え方が様々であることが伺える。伝達や自己表現と共に、他者との関わり・他者理解、円滑なやりとり、人間関係の構築、そしてそれらを可能にするためのスキルが含まれている。さらに、前述の類型を利用すると、メッセージ特性について、言語と非言語が含まれる。

次の2)「児童・生徒・学生に欠けていると思われるコミュニケーション能力は、どのようなものか?」という問いに対しては次のような見解が寄せられた。

「他者が、自分とは異なる感覚を持っていることについての意識が弱いため、同調的なコミュニケーションに終始しているかもしれない」

「相手の意」を汲み取ろうとする意思。発信側の思いはあるのだが、それが受信側に与える影響などに目が向きにくいことがある、と感じることが多いように思う」

「学生たちのコミュニケーション能力は高いと感じます」
「学生には、文章(文字)による伝達能力、文章表現力が著しく欠如してきていると感じています」

「中学生では…「欠けている」というよりは「まだ十分ではない」ということだと思いますが、語彙・ストックフレーズ・文法事項等の、知識に基づく発表・理解の技能や体験(や練習)の不足による発表技能」

「自分の方から相手に関わろうとする力だと思います。また、コミュニケーションを図り、それを維持する力も欲しいです。(関係を継続させる力?)」

「言語能力(文法・語彙能力)談話能力(まとまった文章を作る力)社会言語能力(場面と相手に合わせて適切な言語表現を使う力)方略的能力(非言語的なストラテジー)のうち、とりわけ談話能力と社会言語能力に問題があるように思われる学生が散見されます。自分の考えをレポート等でうまくまとめることができない、あるいは目上の人間に対して適切な言葉遣いができないなど。」

この質問に対しては、まず母語である日本語によるコミュニケーション能力を対象に見ているのか、中学から学習する英語を対象としているかで大きく分かれるが、前者の場合、人と関わる力、相手を理解する力が、大きなポイントとなり、さらに文章力や、相手によってコミュニケーションの仕方を変えていく・適応させていく力が課題になってくるとも捉えられる。もちろん学生のコミュニケーション能力を高く評価している意見もある。また英語によるコミュニケーションについては、母語である日本語と異なり、語彙や文法等の蓄積が圧倒的に少ない

分、また使う機会が限られているだけに、知識も実践も積み重ねがより重要に思われる。

最後に 3)「これからの授業を通して、児童・生徒・学生に身につけさせたいコミュニケーション能力は?」という設問に対しては、次のような回答が寄せられた。「他者の異質性をふまえながら、交流を行おうとする能力」

「それぞれの発達段階に応じた、語彙・ストックフレーズ・文法事項等の知識に基づく発表・理解の技能や体験(や練習)の不足による発表技能上記の技能(スキル)」

「関わること」に気持ちを載せたり、関わることによって生ずるさまざまな感情や事象に主体的に関わることのできる心性(覚悟)」

「相手の意」を汲み取ろうとする意思。発信側の思いはあるのだが、それが受信側に与える影響などに目が向きにくいことがある、と感じることが多いように思う」

「言語というよりも、まず人を第一に考えたコミュニケーション能力が育成できたらと思います。」

「談話能力に関しては、大学の授業で意識的に指導すれば、かなり改善されるのではないかと感じています。社会言語能力に関しては、学生との日常的な指導の場で、粘り強く指導する必要を感じています。」

「演習系の授業を通して、言葉のやりとりの訓練はできます。ただしその際使われる言葉は、非日常的で意味の深さへのこだわりを持つものです。この二点の追求はなめらかさを妨げると思います。理屈か気配りか、熟考か条件反射かという問題にぶつかって悩みます。」

2)の設問と関連して、人との関わり、他者理解、相手に応じての対応の仕方などが重視されているように見受けられる。加えて、理屈や型にはめられるコミュニケーションと、相手や状況に応じて柔軟に対応できる力を身につけることも望まれていると伺える。

コミュニケーション能力について概観した事を参考にして、次に平成23年度より5・6年生で35時間必修化される「小学校外国語活動」で求められるコミュニケーション能力について、学習指導要領を通して考察したい。

Ⅱ. 小学校外国語活動とコミュニケーション能力

学習指導要領について、まず外国語科と国語科を比較すると、外国語科や外国語活動ではコミュニケーションという言葉が多用されているのに比べ、国語の学習指導要領ではコミュニケーションという言葉は見当たらない。目標では「伝え合う」という言葉が使われ、内容等では「話す」「伝える」「聞く」「話し合う」「発表する」と表現されている。

小学校の学習指導要領において、国語と外国語活動の目標を比較すると次の通りである。小学校国語科の目標は

「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態

度を育てる。」と提示されている。一方、外国語活動の目標は

「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と記されている。

前述のように、日本人にとって母語である国語の教育と、学校教育では初めて経験する外国語活動では言語の扱い方が異なるのは明らかであるが、同時に、外国語活動ではコミュニケーションという事が繰り返し使用されていることも明らかである。

コミュニケーションという言葉に関して、小学校の外国語活動と中学校の外国語科の目標を並べると、外国語活動・外国語科では、コミュニケーション能力が重視されていることが、より明確になる。

先の小学校の目標に続き、中学校外国語科での目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」と提示され、高校では

「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」となっている。

外国語活動と外国語科の目標を、小中高で比べると、いずれでも「コミュニケーションを図ろうとする態度の育成」が図られ、さらに小学校では「コミュニケーション能力の素地」を養い、中学では英語の4技能を習得しながら「コミュニケーション能力の基礎」を養い、高校では「コミュニケーション能力」を養うと、コミュニケーション能力が順を追って、素地を作り、4技能を習得することにより基礎を養い、そして基礎を踏まえた上で、情報や自分の思いをよりの確に理解したり伝えたりできるコミュニケーション能力の養成、とつながっている。

さらに小学校外国語活動について学習指導要領解説に沿って詳しく見ていくと、小学校外国語活動新設の主旨として、グローバル化への対応、適応力がある段階からの導入、公立小学校間の格差の是正、の3点が挙げられている。2点目については、「中学校に入学した段階で4技能を一度に取り扱う点に指導上の難しさがある」との指摘を踏まえ、「小学校段階で外国語に触れたり、体験したりする機会を提供することにより、中・高等学校においてコミュニケーション能力を育成する為の素地を作ることが重要と考えられる」と解説されている。

また前述の目標に掲げられている、コミュニケーションへの積極的な態度については、「日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしなが

ら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度等のことである」と説明されている。さらに外国語を学ぶだけではなく、導入の背景として近年の子供達を取り巻く課題が次のように指摘されている。

「現代の子供達が、自分の感情や思いを表現したり、他者のそれを受け止めたりするための語彙や表現力及び理解力に乏しいことにより、他者とのコミュニケーションが図れないケースがみられることなどからも、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成が必要であると考える」

この、人との関わりやコミュニケーションをとることに関する問題について、外国語活動導入についての説明会等では「国語の時間で解決すべき課題だ」という声が小学校教員の間からも多くきかれた。しかしながら、国語の時間に加えて、外国語だからこそ出来る活動や取り組みを通して、問題の解決の一助ともなることが期待されているように見受けられる。現に、外国語活動の時間では、互いに質問をしあう活動や、其々の好きなもの・好きな事を発表する機会が増えることにより、同じ学級の中でもこれまであまり関わりがなかった人を知り、積極的に人と関わることやコミュニケーションをとることの楽しさ・大切さを体験し、それが学級経営に役立っているという意見をよく耳にする。

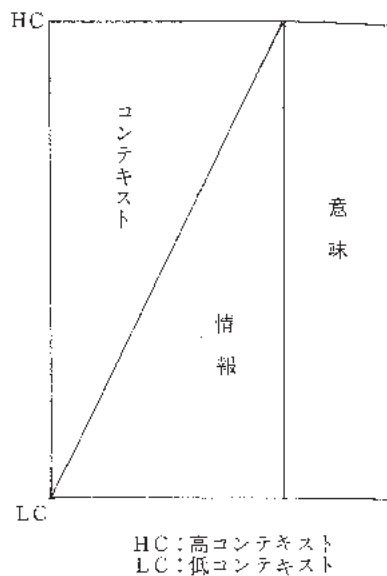
この点が、学習指導要領解説の「内容」の項の「コミュニケーションに関する事項」により詳しく説明されている。「コミュニケーションに関する事項」では(1)外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること(2)積極的に外国語を聞いたり、話したりすること(3)言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ることの3点が挙げられている。

(1)に関しては「児童が使える外国語を駆使し、様々な相手と互いの思いを伝え合い、コミュニケーションを図ることの楽しさを実際に体験することが大切である」と解説されている。自転車の乗り方の知識があっても、実際に乗ってみなければ楽しさも経験できないという説明を加えている。(2)については、これまで中学校から4技能が一度に導入されていた負担をかんがみ、コミュニケーションの中で「聞く・話す」という技能は、「柔軟な適応力のある小学校段階になじむもの」として設定された。さらに(3)に関しては、前述の現代の子供達の課題を指摘しながら、「児童が豊かな人間関係を築く為には、言語によるコミュニケーション能力を身につけることが求められる」とし、外国語活動では「実際に言語を用いてコミュニケーションを図る体験を通して、それらの大切さに気付かせることが重要である」さらに「児童に、普段使い慣れていない外国語を使用させることによって、言語を用いてコミュニケーションを図ることの難しさを体験させるとともに、その大切さも実感させることが重要である」と説明している。

以上のように、小学校に新たに導入される外国語活動には、人との関わり、人とのコミュニケーションの大切さが期待されていることが伺われる。一方で学習指導要

領でも頻出する「コミュニケーション」という言葉に対しての定義づけはない。言語・非言語を通しての関わりを通して、互いを知り理解しあい、自分も表現し、伝え合う、ということを目指しているという様にもとらえられる。

今後、小学校の外国語活動が必修化されると、学習指導要領がめざす「コミュニケーション能力」について、改めて考え直していく必要があると思われる。一つは、日本のコミュニケーションの特徴でもある察しや以心伝心などといった、言葉に表現されない部分を通してのコミュニケーションの在り方と、英語圏、特に米国や英国のように、言葉を重視したコミュニケーションの在り方の相違を、これからの日本の言語教育やコミュニケーション教育はどのように捉えていくのかが問われる。いわゆる日本のように言葉で表さなくとも理解しあえる、または理解することを期待されている高コンテクストの文化と、英語圏の多くに見られる、言葉で表現が重視される低コンテクストの文化の違いに、日本の国語教育や英語教育がどのように対応していくべきか。



(出典) Hall, E.T., *Beyond Culture*, 1976.(p.102)

図2 文化コンテクストと情報の相互作用

最近の調査でも、言葉で伝えるより察し合って心を通わせる事を重んじる人が、この10年で1.4倍に増え、全体の3割を超えた事が、文化庁の「国語に関する世論調査で」で明らかになった(読売新聞, 2009)。日本的なコミュニケーションの在り方を大切にしながらも、国際化に対応できるコミュニケーションの取り方、そしてその教育の在り方が、今後ますます問われることになる。言語教育に従事する研究者・教育者にとっても、取り組んでいくべき一つの大きな課題であると思われる。

引用文献

- Dance, Frank E.X., and Larson, Carl E. (1976)
The Function of Human Communication : A Theoretical Approach. New York: Holt, Rinehart and Winston
- Hall, Edward, T. (1976) Beyond Culture. Garden City, New York : Anchor Press.
- 岡部朗一 (1988) 異文化を読む, 南雲堂: 東京
- 広辞苑 (2006) 「コミュニケーション」, p.1055, 第8巻, 岩波新書, 東京
- 世界大百科事典 (1997) 「コミュニケーション」, p.488, 第10巻, 平凡社, 東京
- 日本国語大辞典 (1974) 「コミュニケーション」, p.395, 第8巻, 小学館, 東京
- 日本大百科全書 (1995) 「コミュニケーション」, p.537, 第9巻, 小学館, 東京
- 古田暁他 (1997) 異文化コミュニケーション: 新・国際人への条件, 有斐閣選書, 東京
- 読売新聞 (2009) 「KYって言われたくない: 「言葉」より「察し合い」増加」, 2009年9月7日